



魔族の娘を拾って
ひたすら中出し
してみた勇者の話

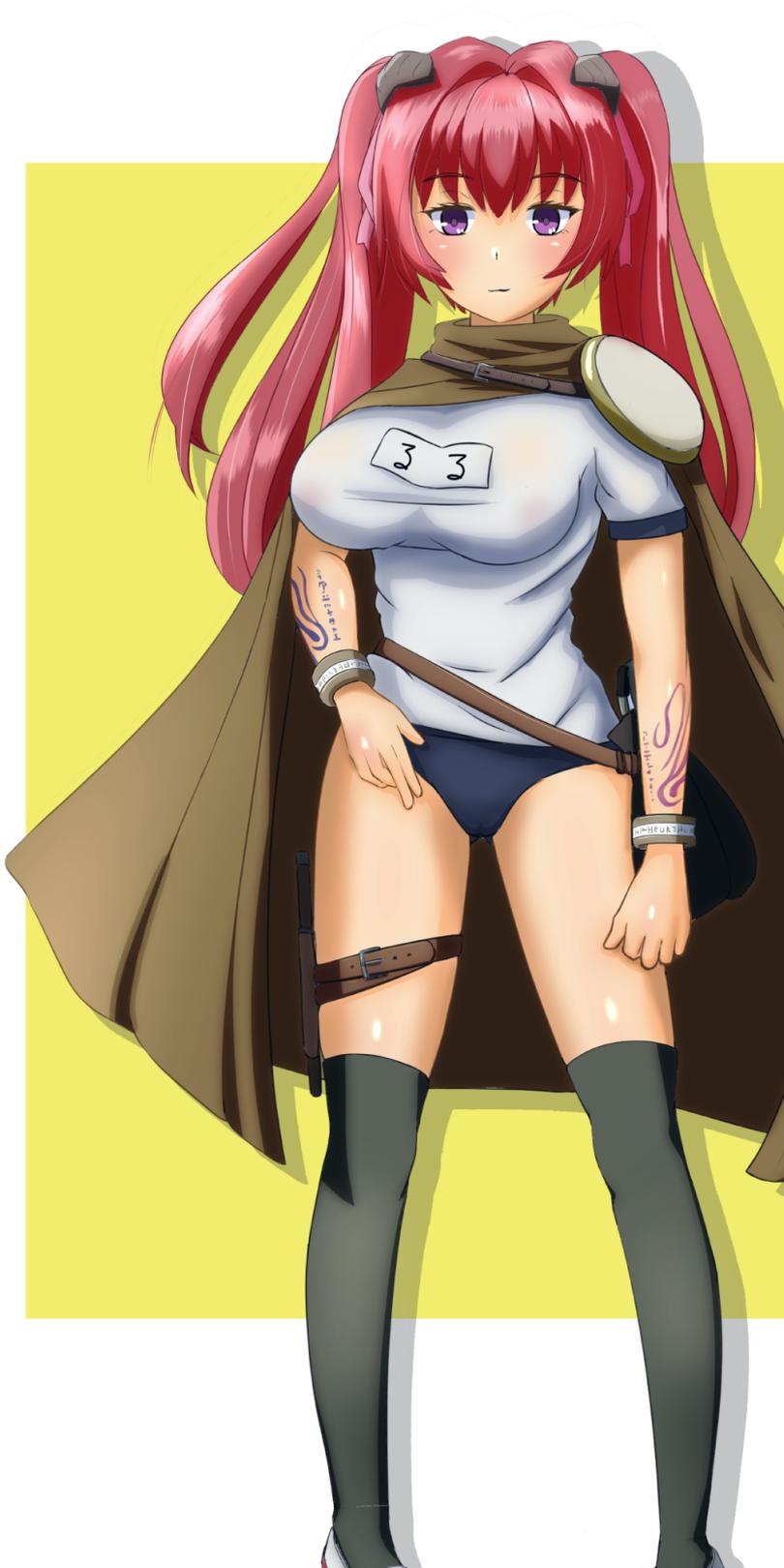
あいさなかまきま

著

絵

ルル・シャン・グリンデル

魔界の由緒ある上級魔族にあたる鬼牙族の娘。大戦では魔王軍の一翼を担い、敗戦時に逃げ遅れた結果、巡り巡って勇者に拾われる。戦闘スタイルは、攻防バフと継続回復を駆使した近接格闘。長命種だが、年齢は若く人間でいえば十八歳ぐらい。



【サンプル版】魔族の娘を拾って、ひたすら中出ししてみた勇者の話

文／イラスト あいさかまきき

「……あ、あの……何を」

ルルが恐る恐る尋ねる。

——立場を分からせる。

言いながらルルの両手を取った。

「わか……らせ？」

両腕から魔力を強く流し込む。

「ぴゃあああああああ」

突然の刺激にルルが声をあげた。

そのまま腕を引く。

「ちよっ……やめ」

抵抗できずに立ち上がるルルの、身を受けるように抱きしめる。全裸で魔力を送る。

ブレザーの布地越しに、ルルの柔らかな身体が伝わってくる。

「やめっ……やっ……いやっ……あっあっ……」

抱きついたまま、身体を撫で回しながら背後にまわる。

ブレザーのブラウス越しに、乱暴に胸を揉む。スカートの中に手をいれ、内ももに指を這わせる。

「ひっ……」

ルルの首筋に息を吹きかける。髪に顔をうずめる。やわらかなメスの匂いが鼻を突く。

指がショーツの中を狙って内ももを伝ってくる。

「や、やめっ…」

ルルは逃げようと腰を引く。すると後ろから固くなったものが、スカート越しにルルのおしりにグリグリ押し当てられた。

腰を上下させ、肉棒で器用にルルのスカートをめくる。肉棒がショーツごしにルルの尻の肉に押し当てられた。

「ひっ…」

グリグリと肉棒を押し付けられて、こんどはそれから逃げるように身をそらす。

すると、前からは指が迫ってきて、ショーツの上から、ルルの淫核をピンポイントで刺激する。

「んあっ…!!」

魔力注入の刺激のせいでガクガクと身を震わせる。

後ろからはグリグリと肉棒がおしつけられる。それはやがて、ルルのショーツの上から恥裂に押し当てられた。

「おちんぼが…」

ルルは今自身に押し当てられている肉棒が、自身に差し込まれることを想像して、身震いした。

するとふいに力が弱められる。

「……？な、なにを……」

ルルはベッドの縁に、おしりを突き出す形でうつぶせに押し倒された。スカートがめくられる。

ショーツにつつまれた形の良い大きな尻があらわになる。

「やっ……」

ショーツをぐいと上に引っ張る。

ぷっくりとした恥部の左右の肉がはみ出す形になって、ショーツが筋に食い込む。

「きやううう……」

ぎゅっ、ぎゅっ、とショーツをひきあげるたびに、ルルは声を漏らした。

「やあ……」

続いて、勇者は下着を尻がむき出しになるくらいまで下ろす。

ルルは、おしりの奥の恥裂を見られまいと、足をとじて抵抗する。

それを阻止するかのようには、尻を平手で一回叩いた。

パーンと乾いた音がする。

「ひゃう！」

ルルが思わずのけぞるが、ベッドに身体がおしつけられていて身動きがとれない。つづいてもう一度叩く。

「ひあっ！」

ルルは痛みを感じたが、それにもまして全身を電気のように快感が巡る。

勇者は叩く際に魔力を供給していた。

続けて勇者は三回連続してルルの尻を叩く。

「ひあっ、ひやっ！ああっ！」

ルルが情けない声を上げる。

叩かれるたびにビクンビクンとのけぞるルルを無視して、連続して叩く。

パーンパーンと乾いた音が室内に響き渡る。

「ひあっ……ああっ！いやっ、やめて、やめて！」

続いて尻の感触を確かめるように両手でつかむ。そして、割れ目を大きく広げて、ルルの綺麗な菊門を覗き見る。

それはひくひくと動いていた。

それから、また大きく手を振り上げると連続して叩きはじめる。

すぱんすぱんと、寝室に音が響いた。

「やめっ……やめて」

勇者は無視して連続で叩く。

「ひあっ！」

ルルは痛みと恥ずかしさと、それを上回る快樂でおかしくなりそうになった。

「……やめて……」

——誰のせい？

「……そ、それは……」

口ごもると尻を叩いた。また、乾いた音がする。

「ああっ！やっ……」

——誰のせい？

勇者は問いかけながら叩く。

「ひあっ……やめて……ああっ……やめて、やめてよお……」

ルルは快樂にまみれて半泣きで懇願する。そして内もものこすりつけながらもじもじとして答えた。

「……全部自分の……せいですう」

ルルは自身の罪を認める。

——でも許さないけどね。

しかし、攻め手を緩めず、そのまま中途半端に降ろされた下着に隠れたルルの秘所に手を突っ込む。

「ひあっ……そ、そんな……またおまんこ、んあっ！」
触れると、そこは既にぐしょぐしょに濡れていた。

指先にルルの恥肉の柔らかな感触が伝わってきて、愛液がまとわりつく。

——ひっぱたかれて興奮したのか？

言いながらくちゆくちゆと指を動かしてルルを刺激する。

「ひっ……あっ」

手を動かされるたびにルルがのけぞる。まくりあげられたブレザーのスカートがゆれる。

「……ひあっ……おまんこ……いじらないでえ！」

ちゅぷちゅぷと粘液をかき混ぜる音がして、ルルが刺激に身を震わせる。

淫核に指をあて刺激すると、動きにあわせて菊門がキュツつと締まるる。

——物欲しそうにヒクヒクしているな。

「ちが……ゆーしゃ、魔力を入れるから」

——ヒクヒクするのはお前が変態だからだろ。

言いながら、激しく指を動かす。



「ひやああああ……へんたいじゃない！……へんたいじゃない！」

ルルは、状況に反したことを言いながら悶えている。

勇者は尻を両手でつかみ、ルルの秘所を指で開いた。

「やあ……おまんこ……開かないでえ……ねえやめよ？……休も？ゆ、ゆーしゃ寝てないんでしょ？」

言いながら雌穴が、ヒクヒクと物欲しそうに動いている。

——疲れマラって知っているか？

そう告げると、もうとつくに硬くなっていた自身の肉棒をルルにあてがう。

ルルは、覚えのある感触が自身の雌穴に擦り付けられるのを感じて、身をこわばらせる。

硬くなった肉棒がずぶずぶと押し行ってきた。

「……あっあっあっ……おちんぽいやああ……！」

ルルの温かいメス穴の感触がカリ首につたわってくる。腔壁が肉棒全体を包む。ゆっくりと出し入れする。

「んひあ……ああ……ああ」

ちゅぱ、じゅぽ、じゅぱ、じゅぷ、規則ただしい音が部屋に広がる。

「ああっ……ああっいやあ……おちんぽじゅぽじゅぽだめえ」

ルルはか細い声で、腰の動きにあわせて声を上げる。

出し入れのスピードを少し上げると、ブラウス越しの胸がぼるんぼるんゆれる。

腰をふり、淫穴の感触を楽しみながら、ゆっくりと手をあげ、また強く尻を叩いた

「ひああ！また！」

乾いた音とともにルルが驚いて声を上げる。膣がキュツとしまる。もう一度叩く。

「ふああ！……叩かないで……」

——ごめんなさいは？

腰をゆっくりと振りながら、叩く手の強さを弱めて勇者はルルに言う。

「うっ……うっ……ひっ……めん……なさい」

——聞こえないよ。

「ごめんなさい！」

——なんだって？

「……ごめんなさいっ！許してくらひゃい！」

ルルはじゅぽじゅぽと出し入れされながら半泣きになって答えた。

しかし、一方で自身で発した反省の言葉にすら興奮してしまう。

それを見透かして言葉をかける。

——よくできました。じゃあご褒美をあげようか。

「……ごほ……うび？」

勇者は叩くのをやめて、ルルの淫穴の奥の弱い所をぐりぐりと突き上げるように腰を振り始めた。

「ああああ……それっ、らめえ、んああああ……ごほうじゃない！ごほうびじゃない！」

ルルの全身を快楽が駆け巡り、たまらず声を上げる。

そのまま腰を振りながら、のしかかるようにしてルルの胸元に手を伸ばす。ブラウスのボタンを引きちぎり胸をあける。その手でルルの大きな胸を引き出した。続いて、いつものようにブラをずらすと、腰の動きに合わせてリズムカルに胸を揉みしだく。

「うっ……ひっ……あっ……あっ……あっ……」

さらに、再度大きく手を上げて、もう一度おしりを叩いた。

「きゃあうう……また、また叩いたあ……」

ルルが大きくのけぞり、いつそう愛液が溢れてくる。淫穴は張り手をきっかけにキュウキュウと肉棒を締め始める。

「そんなっ……叩かれて……あたし……あたしおかしい……いやあ！」
ルルは、そのままビクビクと痙攣し、プシュッと潮を一回吹いた。

ルルは尻を叩かれてイッてしまったようだった。

「ひっ……ひうう……そんな」

ヒザをガクガクと震わせる。ルルの膣がきゅつきゅつと、肉棒を締め上げる。腰の動きは止めない。

「いやあ……もう、うごかないで……おしおきも……ごほうびも……いらにゃいからあ……」

イッた直後に動かれて、たまらず悲鳴が上げる。

快楽が子宮のあたりから、全身を電気のように駆け巡る。

狙って子宮口をグリグリと刺激する。

「だから、そ、それ……らめ……それ、ずるいやつ……おちんぽぐりぐり……おかしくなっちゃう……んあああああああ」

再びルルがビクビクと痙攣し、再びプシュプシュと潮を吹いた。

勇者は無視して腰をふる。乳房を掴み、乳首を強くしごく。

「んあっ！くはあ……ひうう……イッてる……イッてりゅからあ！……」

ルルは子宮口を突き上げられて、刺激が強まるたびに、身体をのけぞらせる。そのたびに潮を吹く。

やがて射精感が高まる。じゅぽじゅぽと動かしながら、射精した。

「……いやああああ……熱いっ……あついでてりゅ！」
どぶどぶと射精しながら、一番おくにねじ込む。子宮口にカリをおしつけて、子宮に精液を注ぎ込んだ。

「ひあああああ」

その刺激にルルも再度塩を吹く。

そして精液を出し尽くしたあとで、肉棒を引きぬいた。

ルルの身体をベッド下に引き下ろす。

目の前に座らせ、汚れたグロテスクな肉棒を持ってゆく。

「……はあ、はあ……」

目の前に突然だされたそそり立つ肉棒を認識するまもなく、口に突っ込む。

「ぷあ……くああ……じゅぽ」

ルルの頭を押さえつけて、数回腰を振る。

「んぐう……んぶ……ちゅぶ」

カリを喉の奥にまで押しこむ。精液と愛液にまみれた肉棒を口内に擦り付ける。

「んん……ぷあ……ん……ぐあ……んー！っんー！」

その乱暴な攻めに、興奮して再び潮を吹いた。

ルルが肉棒を吐き出す。

「げほっ！げほっ」

精液とよだれが混じって胸元に垂れた。

「……ふぁ、げほっ……んはぁ……はぁ……けほっ」

ルルは涙目になりながらどうしようもない快感に打ち震える自身の身体を呪っていた。

——お前は、だれの物だ？

ルルは問いかけられる。

まだ少し硬い肉棒をルルの頬にこすりつける。

「っ……」

ルルは、体液のべっとりついた肉棒をとて愛おしいものだと思ってしまう。うっとりとした表情でふたたびカりにキスをした。

「ふぁ……ルルは、ゆーしゃの……ものです……」

ルルは肉棒の匂いと味に興奮する。

ゾクゾクと身震いして、それからまた座ったまま小さく絶頂した。

魔族の娘を拾って、ひたすら中出ししてみた勇者の話
文／イラスト…あいさかまさき

制作：Be Lily

(c)2024 Aisaka Makiki, Be Lily.